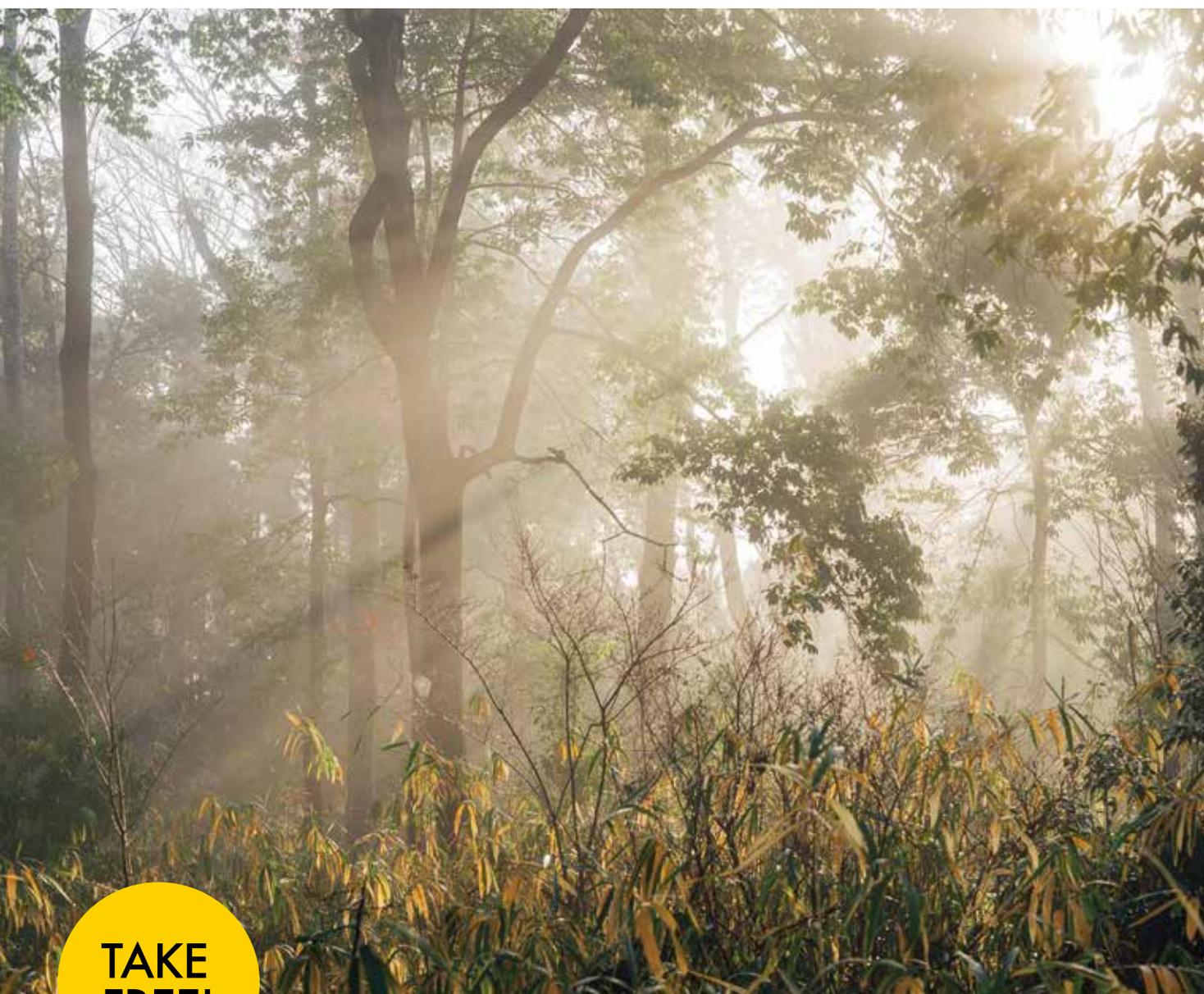


陽楽の森通信

Communication media for the people who surround YOURAKU-NO-MORI



TAKE
FREE!

02. ひとりひとりに それぞれのフツウ (鈴木ゴリ宣仁)
04. 陽楽の森づくりの仲間たち 前田駿介さん | 06. 貴重な里山・陽楽の森 (伊藤ふくお)
07. KUBERU 薪づくり・薪ストーブのショールーム | 08. 陽楽の森の目指すところ (谷茂則)

都市計画の中で、背景へと押しやられた場所、陽楽の森。この場所をフィールドに、『多様性×多様性から生まれるサステナブル』のモデルをつくらうと活動する人がいます。

「1」のふしぎな世界

ひとりひとりにそれぞれのフツウ

鈴木「ゴリ宜仁」 株式会社とすこい代表取締役・牧師・木こり
Norihito GORI Suzuki

少年と森

20年前の話です。当時主宰していた森林ボランティアの活動に、14歳の男子Aくんが参加しました。Aくんは小学生の頃のイジメが原因で学校に行かなくなり、自室に閉じこもり、興味があるのはゲームだけ。昼夜は逆転、髪は伸び放題、何日も風呂に入らないような毎日を送っていた彼が、食卓に置いてあった森林ボランティアのチラシに「Save Forest Save Yourself」と書かれているのを見て「何かカッコええなあと思って（本人談）やってきましたでした。

40年以上放棄されたヒノキ林。急斜面での作業が続き、しかも数年ぶりに野外で身体を動かしたこともあって、Aくんはフラフラになっていました。一日で音を上げると心配しましたが、翌日もAくんは現場に現れました。肩まであった髪が短く切ったことにまず驚きました。

Aくんは「昨夜は疲れ果てて帰宅してカップラーメンを食べたらすぐに眠ってしまった（夜に寝るのは久しぶり）」「今朝、風呂に入ってから来た（風呂も久しぶり）」「作業の邪魔なので髪は自分で切ってきた（散髪はもつと久しぶり）」と照れ臭そうに話してくれました。

三日目の昼休憩のときには、「ここ（森）は僕と似てる」「僕も森も、お互い要らないもの同士だから、ここにいてホッとするんだと思う」といいます。Aくんはまた「ここになり毎日通ってみたい」「午前中は森を元気にする作業をして、午後は図書館にでも行って自分で勉強するよ」「みんなのフツウに無理して合わせて暮らすより、ずっと楽しい」とも。

「親が思っているフツウとは違うし、学校の先生や同級生のフツウとも違うけど、それが僕のフツウなら、それでいいよね」「誰かのフツウは、僕のフツウではないのにな」「みんなそれぞれ



(プロフィール) すずぎ・のりひと 牧師・木こり / (株)とすこい(吉川ロジスティックグループ)代表取締役、SaveForestX代表理事。大阪市出身。関西学院大学神学部卒業。森のフリースクール・どんぐりの家(1993～)、森林ボランティア Save Forest Club(1999～)、SaveForestX(2012～)、(一社)とすこい(2013～)を経て現職(2021～)。発達障害の子どもたちのディサービス「陽楽の森」で展開している。

れ自分のフツウがあるのに、なんで他人に自分のフツウを押し付けるんやろね」「森にはいろんなフツウが詰まっている。いろんな生き物のそれぞれのフツウとフツウがお互いに認め合って、支え合ってる。」

そして最後にAくんは「自分も、森みたいに自分のフツウを大事にしようと思う」と言ったのでした。

発達障害のフツウ

Aくんは発達障害でした。自分の興味のあることについて没頭してしまうこと、それと口頭で指示されたことを理解するのが苦手であるために集団行動に適應できず、それが原因で同級生や担任教師から否定的に扱われていたの

うです。すべての音が音符になって聞こえてしまうのが苦痛で、彼はヘッドフォンが手放せなくなっています。

「味覚が過敏」

Eさん。甘みに対して極端に敏感なので、甘いお菓子や清涼飲料水を摂れません。「みんなと同じように食べたいし飲みたいけど、気持ち悪くなるので食べられない。」

また彼女は熱い・冷たいにも過敏なため、体温に近いものしか摂ることができません。これらが原因で学校では給食が思うように食べられず、同級生や教師からは「好き嫌いが激しい」「わがまま」と言われ、いつも最後まで教室に残され、悔しい思いをしていたそうです。

「陽楽の森」をサステナブルのモデルに

このようなフツウと困りごとを抱える子どもたちはもちろん、誰も疎外されない社会、誰もが居ていい社会がサステナブルなのだと思ったら、一部の人の都合で「居ていい人」と「居てはいけない人」に振り分けられるような状況はサステナブルとは呼べません(日本の幼稚園・保育園・学校はサステナブルでしょうか?)。ひとりひとりのフツウがそのまま受け入れられて、

「僕も森も、お互い要らないもの同士だから、ここにいてホッとするんだと思う」とAくんは言いました。発達障害の子どもたちにとって森は「イライラしない」「不安にならない」「パニックにならない」「穏やかに過ごせる」場所です。



「絶対音感という困りごと」

Dくんは、すべての音が瞬時に五線譜として頭のなかに浮かんでくるという才能を持っています。音楽を志す人からすれば羨ましいような能力ですが、彼にとっては「日常生活を送るうえで面倒くさくてかなわない」のだそ

「すべての音が同じ音量で聴こえてしま」

まうので、複数のことを要求されるとパニック「黒板に書かれた情報をノートに書き写すだけならできるけど、先生の説明を聴きながら書き写すのはできない」「メモを取るとか議事録を書くとかあり得ん、無理!」。後に彼は大学に進学しますが、そのとき大学とかけあって授業に「記録用端末としてスマホとタブレットを使用する」ことを許可してもらっていました。

Cさんは、周囲から聞こえてくる音はすべて同じ音量で頭の中に入ってきます。授業中、教師の声に集中しようとしても、同級生のヒソヒソ話も、廊下を歩く誰かの足音も、隣接する道路を往來する車の騒音も、遠くの工事現場の音も、飛行機の音も、鳥の声も、雨風の音も、すべてが同じ音量なのです。教師の声だけに集中しようとしても、聴き取れないため、疲れ果てて授業中に突然眠ってしまうことさえあります。

お互いがお互いを認め合い、支え合える仕組みを、私たちは模索したいのです。

発達障害の子どもたちにとって森は「イライラしない」「不安にならない」「パニックにならない」「穏やかに過ごせる」場所です。穏やかな気持ちと落ち着いた関係性という土台があると、子どもたちはそこから新たな課題に挑戦したり、新たな人間関係を築いていくことができます(もちろんそれぞれのペースで、それぞれのタイミングで)。

それはきっと、森自体が多様性に満ち満ちているからだと思えます。森はありとあらゆる生きものの、それぞれのフツウを必要とし、支え支えられ、受け入れ合って生きている。

そのことが発達障害というフツウを生きる子どもたちにとって非常に心地よいのだと思うのです。

私は「陽楽の森」がサステナブルのモデルとなってほしいという願いから、「陽楽の森」のなかに遊休馬の牧場を作りたいと夢見ています。困りごとを抱える子どもたちが森のなかで馬と一緒に愉快に過ごす。それは、多様性と多様性が共存できる「コミュニティ」の象徴となるのではないのでしょうか。

(参考文献) 『子どもと学校』(河合肇雄/1999年/岩波書店) 『森の自然学校』(稲本正/1997年/岩波書店) 『ニユーロダイバーシティの教科書』(村中直人/2020年/金草書房) 『よくわかる中環境』(高田宏臣/2022年/ハルコ出版)

前田駿介さん（谷林業株式会社）



「環境」をキーワードに 出会った新しい林業

（プロフィール）まえだ・しゅんすけ
1990年岐阜県飛騨市生まれ。高校卒業後に岐阜森林文化アカデミー。在学中に林業塾（速水林業地で開催される株式会社林業再生システム主催の塾）を経て2010年谷林業株式会社へ入社。32歳の若さにして、社内一の古参。陽楽の森で道づくりや森林管理に携わる山のプロフェッショナル。5歳から高校まで続けた剣道の腕は3段。

林業塾で「何もわからない」と発言する林業家の若社長に会う

岐阜県出身の前田さんは、農林高校に進んだ姉の影響や環境への関心から農林高校環境科へ進んだことで、もともと森に関わることを専門的にやれないか考えるようになりました。先生から「県内（美濃市）に森林文化アカデミーというところがある」と聞き、専門学校へ行くのと同じ感覚で進学。そこで、環境や森のことを仕事にすると、すなわち「林業」なのだと理解したといいます。

う人だと、それがわかんないんですよ。10年前にやった場所に最近行ったら「おお！大きくなったな！」と、驚きました。山が答えてくれること、やってきたことが間違いではなかったことがちゃんと実感としてわかりました。

そんなふうにも奥山にすることが多かった時期に、2014年、陽楽で開催された「チャイムのなる森」に2日で5000人も人が集まったことには衝撃を受けました。「あのふつうの里山で？」僕にはわからない何かを感じて人が集まってきた。こんなことは学校では教えてもらわなかった。考えてみれば広い駐車場もあるし、大都市大阪に近く地理的に恵まれています。

これを機に、谷林業は都市林業を目指すようになり、前田さんも5年間活動した奈良県南部を離れ北部で活動するようになりました。

当時の会社の変化は目まぐるしく、自伐型林業との出会い、薪ボイラー事業の始まり、天川村での温浴事業の始まりと、次々と新しい事業が立ち上がっていました。（一社）大和森林管理協会（以下、大和協）が設立されたのもこの時期です（現在では多くの部門が大和協の管轄になっています）。

変わっていく会社の中で前田さんは「こんなに広がるの？なんだか嫌だな」と思ったこともあるそうです。しかし

前田さん（以下敬称略）…2学年になると求人票を見るようになります。卒論の担当の先生から「事務も現場も知っておくべき」「そういう人が林業の生産現場を変えていくべき」と教わったことが印象に残っています。

その観点で見ると、求人票の中には惹かれるものが少なく、「何かもつといる」とできるところはないのかなあ」と先生に相談したら、「林業塾（三重県紀北町の速水林業で開催される林業塾。多くの人材を輩出している）」っていうのがあるよ」と教わりました。5日間で10万円の受講料をアルバイトでな

同時に前田さんの中にも変化が生まれていきました。

前田…温浴事業が始まって以来、僕は切り離された感じでしたけど、何をしていたかという点、当時たまたま受託した王寺町からの仕事に可能性を感じて、静かに地域のニーズを開拓していってました。それは谷家という地盤があったからこそであり、またタイミングよく町長が畠田地区の森林整備に熱心だったからこそです。これは今となっては、大和協の一事業の基盤となったと思います。谷さんのプロジェクトは、広範囲に同時多発的に行われているので、外部からは何をしているのかわかりにくいかもしれません。でも、この陽楽の森プロジェクトを通じて関連づけていくと、見えてくると思えます。

「里山」から「ぶれん」となく

入社以来、林業一筋で活動してきた前田さん。陽楽の森プロジェクトの未来は、その目にどう映るのでしょうか。前田…僕は所属先である谷林業と、谷さんが理事でもある大和協を俯瞰して見る位置にいます。中間的な立場にいるわりには、「陽楽をこうしていきたい」という思いがあるんです。それは、ここが人が集まってくる場所になり、ふつうの里山に価値が生

陽楽の森には林業のプロがいます。岐阜県飛騨市出身の前田駿介さん。なぜ今、奈良県の陽楽の森に？どんなふうに関わっているの？普段あまり表には登場しない「森で働く人」のお話をご紹介します。

んとか賄い、2年目の上半期が始まった頃、入塾しました。そこで出会ったのが谷茂則さんでした。

最終日にグループディスカッションがあり、手を挙げた人が自分の悩みや課題を語り、それを聞いた他の参加者が、行きたい（就職したい）人のところへ行くことになっていました。そこで手を挙げた谷さんは、「とにかく何もわからない」と言うんです。「ただ、自分は今から1500ヘクタールある山をやっているから、それはならない。相続税や負債の課題（陽楽の森通信※2参照）があったが、それについては新たに林業部門を立ち上げるくらいには落ち着いてきた。今は、陽楽の森でユンボを使って道を入れている。番頭のな人がいないので、誰かいい人はいないのかと探している」という話でした。

僕は断然、谷さんだった。ディスカッション中はもう、ここに行こうという前提で話を聞いていました。当時の谷さんにはまだビジョンがなかったし、一見すると意思が弱そうにも見えたのですが、フィールドもお金もある若社長が何か面白いことをやりそう、この人だったら何か新しいことをやるかもしれないという雰囲気は、あの当時からありました。突然「行きたい」と言い出す僕に、谷さんもびつくりしていました。こうして、設立してまもない谷林



陽楽の森で森林整備

まれること。近年では、かなりいろんな人が関わってくださるようになったと感じています。

僕の中の役割というよりは、林業的な出身者から見た「陽楽の価値はここだよ」という方向性を持つことでありたい。日本の「里山」であることからぶれずに、そこに関わってくださる方たちの考えを取り込んでいけたらと思います。

ももとは、ここまで広くは考えていなくて、林業一直線でした。山を起点に描く谷さんの未来ビジョンは、林業を知る僕から見てもちょっと常識から逸脱しているようなスケールの話なんです。

でもその一つ一つが形になっていくのを見て驚く人の顔を見たい。たとえば、「チャイム森」がわかりやすいですね。僕は陽楽で道づくりをしていたので、あの里山をよく知っているわけです。重機しか走らない道を、子どもが嬉しそうに歩いていて、人々がそこでものを買ったたり、新しい人と出会ったりして、新しい変化を見ることができた。「そういう場を



チャイムの鳴る森での一コマ

業（当時は山基不動産谷林業部）へ、二十歳の若者が飛び込んだんですね。前田…1000ヘクタール以上の山主って少ないですし、資産がある人のほうがいろいろできるのではと二十歳の自分でも予感していました。入社してみても予感と違っていました。うことはありますが、僕から望んで来たのだから、後から裏切られたみたいなのは思っちゃだめです。幅広くやらせてもらってるんですから。狙いどおり、想像以上に広がっています。

入社5年目の衝撃 あの普通の里山に5000人？

前田…2010年の入社後は、まず清光林業に研修に行き「壊れない道（※1）づくり」の丸太組み（※2）を1年間、そして研修後は川上村の谷家の所有林で道づくりをしていました。その後数年間は、新しい社員が増えたり、辞める人もいたりする中で僕はひたすら川上村、黒滝村の現場で道づくり。

ちなみに、山の仕事って、社会からは見えにくく、自己満足の芸術品を作っているような気持ちになることがあります。山しか答えてくれません。それも、山が大きくなったと気づくのに5年か10年くらいかかるんです。5年以内に林業をやめちゃ

自分はつくってたんだな」と思えたのはやりがいでした。望むことはそれだけです。

奇跡的な地名「陽楽」が聖地になるかもしれない

「事務も現場も」を身につけ林業を変えたいと思った前田さんは、今それができそうどころまでできました。とかく製材や販売が賑わう一方で、実は山や林業が置き去りになりがちな現実があります。そんな中であくまでも山を起点に考えて、苗づくり森づくりに始まり、人に価値を届ける場所まで事業を進めていくのが、谷林業や大和協が目指すところであり、また難しいところ。しかし、前田さんには、林業からぶれずに、人が集まり森が喜ぶ里山として陽楽の森の姿が思い描けているようです。

前田…今は陽楽で、ひとつずつコンテナを形にしていけないと、思っています。いつかこの取り組みが林業を超えて「森林業」といわれているものの概念をつくるかもしれません。そのとき、「陽楽」というこの奇跡的にいい地名が聖地になるだろうと思います。

陽楽の森であなたは、それと知らずに前田さんがつくった道を歩いているかもしれませんね。きっと前田さんはそのことを嬉しく思うはず。

（構成・阿南セイコ）

※1＝災害に強いいつでも使えることを目標とする林業のための作業道。路線の選定が重要。
※2＝丸太を用いて路面や法面を安定させる。壊れない道づくりの技術のひとつ。



KUBERU

林業会社が立ち上げた
薪づくり・薪ストーブの
ショールームへどうぞ



KUBERU は (一社) 大和森林管理協会内のブランドです
<https://www.kuberu.org>

私たちがお迎えます



アウトドアの
達人
川端康仁

薪ストーブの
スペシャリスト
小島 忍

軽にお立ち寄りください。

火のある暮らしをもつ一度日常の中に
取り戻したい。林業会社が立ち上げた
「KUBERU」にはこんな思いが詰まっ
ています。

町のあちこちに、薪ストーブや薪
ボイラーなど「焚べる」場所ができるこ
とで、暮らしの中に取り入れられた薪に、
新しい価値が生まれます。放置され、竹
や笹に覆われた森を整備しながら、ナラ
枯れの木を伐採し、障がい者就労支援の
取り組みと協働して薪づくりをします。
森に手を入れることで生物多様性がよみ
がえり、石油代替エネルギーとして脱炭
素社会にも貢献します。何より、林業者
や森林所有者にやりがいを取り戻し、そ
して私たちの心に潤いと癒やしを与えて
くれます。

KUBERU ショールームでは、薪
ストーブを展示して、火のある暮らしに
関心を抱かれている方々のご相談にのっ
ています。また、陽楽の森の特設コーナ
ーで焚き火会を催したり、薪サウナの開発
に取り組んだりしています。どうぞお気
軽にお立ち寄りください。

ショールーム | 〒636-0021 奈良県王寺町島田 2 丁目 88 TEL 0745-51-0066 (ご来場のご予約は、お電話または HP フォームよりお問い合わせください)

陽楽の森 連続講座 全 10 回 陽楽の森から考える 一新常態ニューノーマルの輪郭

日時: 2022 年 6 月 - 2023 年 3 月 毎月第 3 土曜日 15:00-17:30
場所: 「陽楽の森」KUBERU2 階 ようらくスタジオ 奈良県王寺町島田 2 丁目 88
参加費: 会場参加 (定員 40 名)・オンライン参加ともに 500 円 ライブ配信あり (要事前申込)

申込み: 詳しくは、WEB サイトをご覧ください。
<https://toyouraku.com>



主催: チーム「めだか」・(一社) 大和森林管理協会

第 7 回

12.7 土

内山 節 哲学者

自然との関係を通して
現代社会を捉え直す
未来社会のデザイン

第 8 回以降の講演者 敬称略

伊藤立平 / 鈴木ゴリ宜仁 / 堀田新五郎・谷 茂則

コーディネーター: 家中 茂

マツが植栽され、西側には生コン会社があり
ました。そのテータマツが植栽され
た山で、5 月になるとウンゼー
ンゼーギーギーと鳴き声が聞こえ
てきます。ハルゼミと呼ばれている春に
鳴く蝉が棲んでいたのです。ハルゼミは、
日本ではアカマツなどが自生する里山環
境に生息しているのが定番だと思ってい
た私は、植栽されたテータマツ林でのそ
の声に驚いたのです。

そして、ハルゼミの鳴き声が収まり梅
雨に入ると、クヌギやコナラの梢を飛ぶ
小さなシジミチョウが現れます。朝早く
林縁部のネザサを見ていくと、そのシジ
ミチョウが見られます。多くは、ミスイ
ロオナガシジミ。アカシジミやウラナミ
アカシジミなども運がよければ見ること
ができました。まさに、日本の里山が陽
楽の森だと私は考えています。

キチョウの越冬態や、ゼフィルスと呼
ばれているシジミチョウの仲間、ハルゼ
ミなど学術的な観察ができる貴重な里
山、陽楽の森の環境が年々良い方向に変
化しています。陽楽の森にかかわる人た
ちが、草刈りや木の手入れ、散策路など
を整備してくださっているお陰だと私は
考えています。

今後、どのように里山環境の陽楽の
森が変化していくか見守っていきたく
思います。

(最近になって、南に棲むキチョウと区別す
るため、この辺りに棲んでいるキチョウは、
キタキチョウと呼ぶようになっていきます)



ハルゼミが棲息
テータマツの植栽



春に鳴く蝉

ハルゼミ



成虫で越冬

キタキチョウ

貴重な里山・陽楽の森

伊藤ふくお (昆虫写真家)
Fukuo Ito

(プロフィール) いとう・ふくお 三重県出身。身近な自然の観察会「ふくおと歩く」や撮影を続けてきた。著書に『どんぐりの図鑑』『ひつぎむしの図鑑』(共に・トンボ出版)『バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑』(北海道大学出版会)など。

「陽楽の森」という呼び名でこの丘陵地を見るようになったのは、10 年ほど前からです。それまでは、片岡城跡丘陵と私は呼んでいました。

その片岡城跡丘陵東側に開発された片岡台団地に大阪から引っ越してきたのは、1976 年の秋でした。引越した後、休日には片岡城跡や畑やお宮さんをめぐる散策コースを歩いて、写真撮影や昆虫採集をしていました。

そして、いつの頃からか、里山を代表するシロチョウ科キチョウで、1 年の間に 4 回、卵から成虫までサイクルを繰り返して、冬は成虫で越冬するキチョウに興味を持ち、観察や撮影を続けていました。でもどうしてもその年は越冬しているキチョウを見つめることができませんでした。

ところが、意外と簡単に 1978 年 2 月 19 日に越冬態に入ったキチョウを見つめることができたのです。それは、棚田の南向き法面で、オスのキチョウでした。その後は、「南向きの草の生えた法面」を探していくと、多くはイネ科植物の茎につかまって越冬しているキチョウを見つめることができるようになりました。このキチョウの越冬のしかたを教えてくださいました。

また、陽楽の森北側の東には、テータ

陽楽の森の目指すところ

谷 茂則

チーム「めだか」代表・(一社)大和森林管理協会理事
Shigenori Tani

ええ山を創りたい

林業に関わり、それなりの時間が経過した。林業関係団体が主催する山林視察旅行などに参加するたび、林業家が視察先の山を見ながら「ええ山やなあ」と称賛する現場に幾度も立ち会った。自らが創り上げた山を背景に「ええ山や」と称賛された時のホスト側の林業家の誇らしげな表情を見て、羨ましく思い、「苦労様でしたとも思った。「私もええ山を創りたいなあ」とその時々思った。

ええ山とは何か？ その条件は何か？ 気の遠くなるような年月を経た巨木があることや、景色の良さや珍しい植物や昆虫がいること、誰の手も入らない悠久の天然林だけが「ええ山」として思い浮かぶが、私が「ええ山やなあ」と思った山は、その山を創った人の苦労話や充実感と長い時間をかけて培われた山に対する愛着がじわりと伝わってくる山だった。

「この木を植えたのは、お爺さんの時代でな。私も小さいときに一緒に山についていったんや。木も大きくなったわ」とか、「ここに作業道入れるときは、ブルドーザーで入れたんや」とか、

世代を超えて手塩にかけて育ててきた過程に対する清々しい実感であり、そこには、その山づくりをした人たちの笑顔や誇らしげな佇まいが共にあった。そんな山を創った人たちの人柄と山があり様が絶妙に調和する山は文句なく「ええ山やなあ」と思った。そんな山は各林業会社の看板山として地域の人も慕われていた。

森林整備するも 持続できなかった都市林

ええ山、つまり自分達の看板山を創りたいと思う時、私の脳裏を一番よぎる山はいつも、「古木を目指して山守さんによって育成されてきた手入れの行き届いた吉野林業地の山」よりむしろ、「都市に程近い何の変哲もない放置された雑木林でしかなかった陽楽の森」だった。数ある管理山林の中で、陽楽の森を看板山にしたいと思ったのは、都市に近く林業家だけでなく多様な領域の方との関わりの中で活動しながら共にええ山を創ることができるし、創ったええ山に多くの人が来てもらい、森林や林業の仲間になってほしいと思っただからだ。

「陽楽の森をええ山にしたい」と思っ
て以来、二十年近い時間が経過した。森林ボランティアの方たちに助けてもらい森林整備を行い、笹や竹を刈り払い、谷林業のメンバーたちとは壊れない道を開設した。イベント「チャイムの鳴る森」を開催した際には、光が射すようになり、多くの人が森で賑わう光景が目の前に広がった。山づくりに関わった林業者としてかつての真っ暗で藪化した森の姿を思いながら、酸いも甘いも様々な出来事を経て「随分ええ山になったなあ」としみじみと感じた。昆虫写真家の伊藤ふくおさんには、ハルゼミというセミが鳴くようになってしまったと思わぬ情報も授かった。「陽楽の森」は谷林業の看板山になってきた。

しかし、自然の力は手強いもので、手を入れないと、すぐに笹や竹が生え茂り、元の木阿弥のような状態に戻ってしまう場所も多く出た。おまけにナラ枯れも起こる始末。林業家とその関係者だけでええ山の状態を保ち続けるのは至難の業だと痛感した。何が足りないかと途方に暮れた。

みんなで創る森林・ 陽楽の森らしさ

それでも、陽楽の森をええ山にする活動はその過程で、社会的な広がりも見せた。障がい者福祉施設とすこいやなないるサーカス団の人たちの日常的な活動の場所になり、利用する多様な人の貴重な居場所にもなった。どすこいの鈴木ゴリさんが子供たちの快適な居場所づくりの一貫で笹刈りを定期的に行ってくれるようになった。元の木阿弥になった笹の藪は再び過ごしやすい状態を取り戻した。一緒に取り組んでくれる仲間たちとみんなでええ山を創っていくという選択肢があることに気づいた。

最近、陽楽の森プロジェクトの関係者で正式に森づくりを行うチームの立上げを検討している。チームの名前は「みんなでつくる」略して「みんつく」になりそうだ。陽楽の森は、燃料革命の後、長らく人の手が入らなかったため、植生などが豊かとは決して言い難い。土中環境まで劣化してきているという指摘も受けている。この状態をスタートに、自分が生きていく間に、できる限りの手を尽して本当にええ山になるように活動を積み重ねていきたい。植生や土が豊かで、生物の多様性も高く、収穫も多く、地域の人にも愛着を持ってもらえる本当にええ山を目指して、より高い理想を頭に思い描きつつ、みんなで試行錯誤しながら豊かな陽楽の森を育てていきたいと思う。

陽楽の森がみんなの手によってええ山になるまでの様々な出来事をみんなと振り返りつつ、いつか森の中でいっぱい酌み交わしたいなと願う。